

大聖院：不消靈火堂

弥山頂上にある不消靈火堂は1,200年以上前に焚かれて以来ずっと燃え続けてきたと伝えられる神聖な火が収められています。伝承では、大聖院の開山にして、同院が属する真言宗の開祖でもある空海（774-835年）が、806年に弥山で修行を行ったとき、この火をどのように付けたかが伝わっています。その具体的な修行とは清めの護摩焚きです。護摩焚きは真言密教において重要な役割を果たす儀式で、心を清めて負の思考と邪気を取り除くと信じられています。

不消靈火堂は長い年月の中で、自然災害によって何度か破壊されています。最近では2005年に全焼し、翌年に再建されました。先代の建物の黒焦げになった支柱が現在のお堂の一角に展示されています。空海の神聖な火は後壁の前にたたずむ仏像の傍ら、長い口ウソクの上で燃えています。一方、建物中央にある囲炉裏ではもう一つの火がくすぶっています。囲炉裏の火は巨大な茶釜の中にある霊水を沸かすために使われていて、参拝者はこの「癒しの水」を備え付けの紙コップに注いで飲むことができます。